

2012年 2月21日・「東奥日報」では

## 生きる悲しさを表現

田澤ちよこ詩集「四月のよろこび」 泉谷 明

郷土の一冊

弘前の田澤ちよこさんが、2冊目の詩集「四月のよろこび」を出されました。あとがきに、こうあります。「今までの、読者から書く立場に変わった還暦を迎えた新人の私は、自分の生活記録の助けにと不肖にも思っただのです」。これが、1冊目の詩集「ロシア向日葵の咲いている家」（むうぞく叢書、2002年）出版のいわれです。

還暦を迎えてからの詩作、このことにびっくりです。詩は青春の文学でしたが、いまでは、ぼくも含め年を重ねた方が多いです。彼女には、そうなるからでも書かねばならないものがあつた。このことだけでも、頭がさがります。

朝は父の見送り／ロシア向日葵のそばを通り抜け／木柵の門扉のところまで行くと／迎えの当番兵が礼儀正しく挙手の礼をする

（「ロシア向日葵の咲いている家」より）

彼女は、この一連のことを、書かねばならなかったのです。彼女が4歳のとき、満州モンゴル国境でのノモンハン事件で、父が戦死しました。

今回の詩集には、49篇がおさめられています。こんどは父からはなれ、花の作品です。花を生ける、そんな日常で、花に負けない言葉の美しさを、との姿が感じられます。

生けるとき／周りの騒音（おと）は遠くなる 時間はとまる／花のかたちだけが 心に在る

（「秋の花展」の部分）

淡々としてはいますが、花のいのちと共にありたいという生き方が読めます。

あなたを好き／と 心の中で語りかける／あなたのすがたを／あなたよりもっとあなたらしく／表したい

（「花よ」の部分）

田澤ちよこさんは、花はきれいだとは書きません。花にかかわりながら、日常の自分について、あるいは人間の在り方について書いているのだと思います。

ノモンハンを引きずってはきましたが、いろんなものを解きはなつことができたのか、すぐれて、よろこびそのものの作品も書くことができました。

とても痛かったの と／母になったひとの／幸せそうな微笑／外の小雪のちらつきも／大震災の騒ぎも／放射能の不安も関わりない／春 四月／至福のよろこびの ひととき

（「四月のよろこび」の後半部分）

「解きはなち」と記しましたが、詩集の最後に置かれた作品「見たことのない花」は、ノモンハン桜のこと。人間が生きていくという悲しさ、生きるせつなさが表れています。

（詩人、弘前市）

と紹介されています。